

席上
奇觀

恒根草

二

^ 13
3105
2



門へ13
3105
2

在源平文海ノ荒々書

在源平文海ノ荒々書と云ふは、
天竺の頂都相國寺に文海と云ふ僧あり、
遠く西國のいへ、
其頃、
又内毛初め、
多く將軍家も都を没落、
かぞへ行脚して、
しに流石都もあつて、

昭和九
七月二三日
昭求

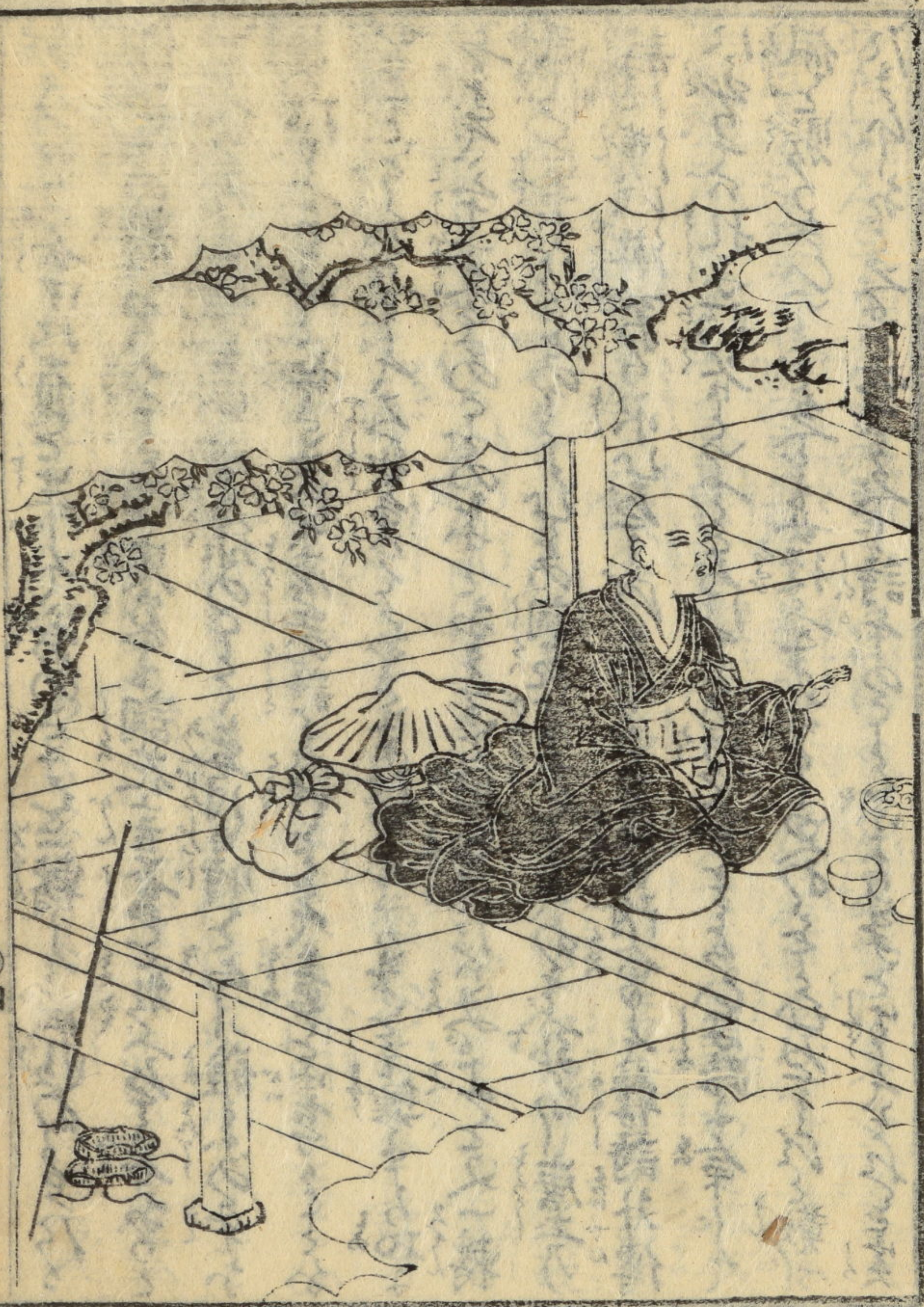
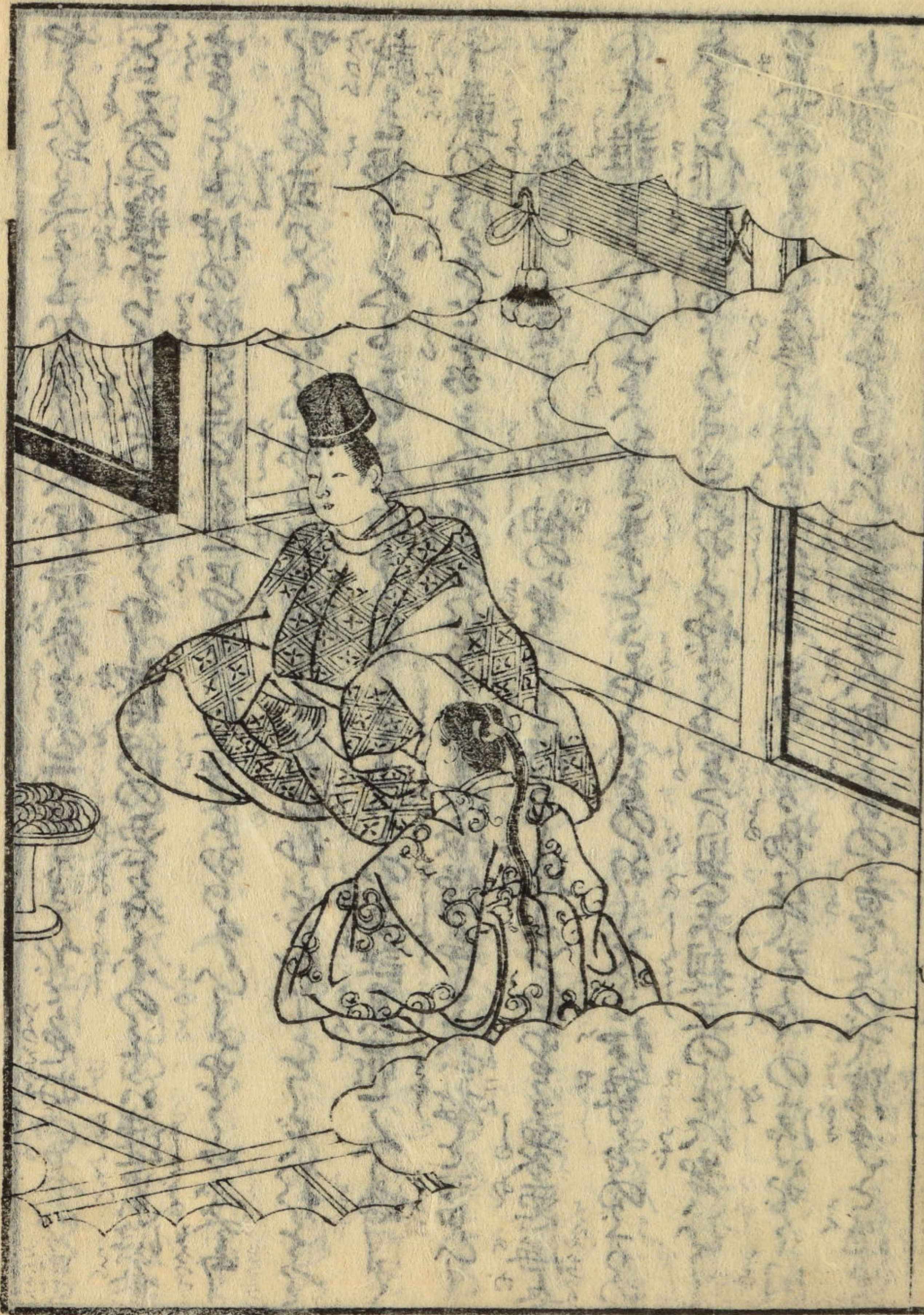
一 直線草紙

げに施奉り安らふ人程路よそそとる吉野の元とも見やれや
各々春の頃ハ弥生の末にけ花もつづま教習もつ風情も喜
ぶくもくど山隈へ入るよ日雨もはくま春に後さし花より
かに知らぬあゆ山せそとててあはく建行も人あそよあ
あそとを字のさそせんてんてん畑所もああや花のか
またもゆもあの人家ののちんてあたらはなま今も
りそわらに殿造いそよはくはくこい難いそ人のあ
ま海のやまの軒のまの御個て内と花をみゆりそあそ
誇といやうそ投宿とそよを暫あつてあそ案内するのあ
一間あつて座すまやそ茶菓菓あのおもつて応あそ
終日の饑といそとてそや安かそらたもあそこの世間を

かきもて居今あんと見せらばはまてそらそ人出なそ
まのまのいそよそいそそらそあそはそまそらそ
北海の野へ移らばたは海神祠し山路のふちそあそ踏そ
しそいそわそかそともそあそあそあそあそと謝
まそ主そから坐機の境はそ人そあそあそ師の身ひきてそ
にけるこそそそあそ茶屋といぐそあそあそあそいあそ
もあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ
上もそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ
すもそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ
んそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ
そそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ

傳りとも不平の事いふ事ありあり時和家の跡を掃きよす
 こと歌本も世々の撰集に載らば口傳にも傳らば是れは
 なるに傳りてはなるの傳りてはなるの好を放蕩
 の者のやにりいり其安經の流り伊勢物語にける若狭に著
 男のいりりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 化名いりりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 こゝろいりりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 暮が形とたゞいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 ぞとに暇びらあつたるは古とていりいりいりいりいりいりいり
 密通の事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 傳りてはなるに傳りてはなるの傳りてはなるの傳りてはなる

やりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 とていりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 言とも神の事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 かゝる或いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 戯れも母の事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 千載の事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 とも花陽の事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 誰一人いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 作者者いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 頼りの事いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり



どのありをきけに有と生しん女のこまを二轉く風流のそら
 作お結の體ありをこゝの源定家も詞花と言葉と形をなすありと
 ころらあふれは言はくは定家のこゝも言はくは時とや 雜家の言ふ
 どのありをきけに有と生しん女のこまを二轉く風流のそら
 かまこころをきけに有と生しん女のこまを二轉く風流のそら
 ろまを二轉く風流のそら
 風流のそら
 詩に漢に游女あり水にたぐはくありは後世附會へ轉詩外傳
 にありて孔子阿谷とて言はくははくは女とて言はくは命とて
 佩と賜りきいふも言はくは女とて言はくは命とて言はくは
 たりけりありて言はくは詩のこゝも言はくは命とて言はくは

ありて言はくは命とて言はくは
 系とて言はくは命とて言はくは
 ありて言はくは命とて言はくは
 と彫く事と飾り虚と構生る日盜跡あり者あり東齊とありの歌
 のげくおとすて女とて言はくは命とて言はくは
 とありて言はくは命とて言はくは
 或男とありて言はくは命とて言はくは
 頼ありて言はくは命とて言はくは
 くと佛人を頂道明法師の遊行ありも立條の文神隱ありたりあり
 不説ありて言はくは命とて言はくは
 ありて言はくは命とて言はくは

却て人の嘲と生ずるはあり是れ親民の作り出さるるものに依り
 鈎とて引く佛たるはしりしと云経より善門品の二十一身應記
 の説に附會し楊柳觀音のよの形艶靡にらるることをいふ此説を
 生じたるものあり光明皇后聖輪の化身と云ると同其の説に入らる
 たるを如く交國の人のやいを人々をいふの化身誰の後身か虚
 誕の説をあたふ事口破にのりて傳記に載て懸るものあり百人
 の中二ものるるをもたぬをいふも唐の聖孔子す當時化身乃
 説の後世識緯の書を作りてより彼國も皇の稽山川の靈ありと
 云ふやち交國の人の強忍去異の人もあはるる者多し凡人
 ありて佛菩薩神の化身ありと云ふものあり今日もあはるる世相
 公と説くは時平義経と敬起はる推原と化身ありと云ふ説あり

こと漏れりともなりから虚誕の過さるるをいふも唯荒涼放蕩の
 行名をすく時平義経と又國に説く人々百人首に載らるるは
 彼方の二条の石末宮の御息所はんとせしれ屏風に龍田川は紅葉を
 りてとてことかきむと題して素性法師とていづくやんるも趣意は
 龍田川は紅葉教をてはるる一足の練を頼頼のうら深きと云わたり
 こそかきむるはるる深きと云ふはあはるる神の御代も
 こそかきむるはるる深きと云ふはあはるる神の御代も
 題にも進み趣も風情あるもそのあはるるものこの頃より水くると
 くり濁りてよまあはるるはるるの川水と深きと云ふはあはるる
 其の傍らとく深きと云ふはあはるるの傍らとく深きと云ふはあはるる
 頼と説くは頼ありと云ふはあはるるの傍らとく深きと云ふはあはるる

覺明義仲と評するに陽々す

後白河院の「親臣」言通憲入る信西もまた「實義」の御孫
 弟の息に友氏南家の儒流にして資性聰明類は古今の流
 達し詩文の道す時流もまた時の人も其廣きに服せられたる
 高階氏に言つるとして儒術も果したる一登庸也と云ふ
 其母も後白河院の乳媪あつたと云ふ帝即位のらも其親を
 母に執遇せし者あり後雅繁も通憲の名も信西もあつた
 ち朝政を執り威福はのりて遂に信賴多し權と云ふや平氏
 乱を承り平相國信盛又信西常は法皇に親近し平氏の短と
 云ふと情なく遂に戮死せしもの一門救くよめし其妻腹に堂
 丸と云ふ方にいとと乳母懐き平津のち居たりと云ふ南都興福寺

の愛後の「親臣」言通憲入る信西もまた「實義」の御孫
 他は少くも傳一門に十行と讀下はの聰明にして多しと云ふ
 の要なりと云ふとく多し終りては法皇南京の傳燈世に
 といふやも或時乳母ある者なりて思の成るはりては
 其も又入道殿常しく平氏の跋扈を憤りて其權を奪はんや
 禍ともらむとのを度子のこゝろ早く出家せん又君の事
 ともくは流るるに絶つて諸を國に送る云ふと云ふは
 ことごとくはつたはる相國の怒りには法皇も皆人の
 なる禍のそとにもあるせんははる此寺の阿闍梨も
 其も又承知する人の子ありて平氏に官賢此まらん
 其も又承知する人の子ありて平氏に官賢此まらん
 其も又承知する人の子ありて平氏に官賢此まらん

死たりと憤り来氏と亡く怨を報んとはをなせり九方の云
 此の師の阿闍梨剃度くを夫坊貢明とぞ呼ぶ剃度の師
 とし多項扶助の恩のまじりしを報讐の志はしとて
 におぼしより其まことさびたりしを幸ひ三輪のやうに橋知時を軍
 頭に連れたる徳ありと師となし明言兵書にをてて子孫を教へ
 して其頃まへに南都北嶺の裏後やまをいふ合戦にやふ時をた
 師の阿闍梨も秋口の徳海法王の干城やまをいふとてあつたはし
 とてより聰明の備ありと憤りとを幸へさびぐふ其まのうらた兵家
 の大要を運ぶの術を強きとてあつたはし得て十九才の秋の頃より
 行脚を振るへる南嶺と離れ今この都を登りてかきとれしを居て
 けりあつた相國を刺くひの怨を報んと復しや相國をいふ茶驅

路を拂へ入る侍衛雲のまじりて源氏の一族を合ひとて
 其は者々を運ぶの術を強きとてあつたはし得て十九才の秋の頃
 ときをいふより南嶺と離れ今この都を登りてかきとれしを居て
 けりあつたはし相國の東よりあつたはし其の夜の隙隙ありとて
 隨身の侍の社をいふに丁多根籍者として撃ちつたはし射撃
 たりと跡を晦して北にがまて動静を伺ふは波瀾よりいふ處に
 のれとて追捕者重なりとて相國は身とてあつたはし北國よりい
 其の免角よりいふ其の身とて相國は身とてあつたはし北國よりい
 法中さまへの怪異ありと風國よりいふ其の明をいふよりいふ
 ともいふこと考ふるは無乱の北國家の志変らるるなりと知れ
 きて其頃まへに報讐の志とてさびぐふ其まのうらた兵家

義仲密に義兵の傳しありて、さうせん、さうせん、彼人こそ、あてまらぬ事
 とて、まをせ、やと、義仲の結し、行く相見と、おの、義仲云、貴僧、何り
 敵、やと、その、あり、そ、ま、ま、く、ま、も、や、貴、明、を、ん、て、ま、未、上、言、と、の、ん、た、ん、ん、
 り、く、く、く、は、も、も、も、も、く、平、氏、の、孫、暴、天、人、の、惡、む、と、も、ら、中、に、も、法、皇、を
 離、宮、に、坐、團、し、ま、る、古、今、例、あ、と、不、臣、の、多、り、公、卿、並、と、い、ひ、ら、ん、も、
 カ、ら、く、く、く、後、に、其、毒、を、と、ま、び、諸、源、又、執、人、繼、り、て、む、あ、く、
 自、滅、と、傳、の、外、お、し、な、り、く、平、治、は、治、ま、り、と、い、ひ、か、ど、却、り、乱、陽、と、年、
 て、その、能、と、ま、ら、む、ま、ら、ん、相、國、位、人、臣、と、ま、り、り、二、門、皆、兼、違、し、九、元、之
 下、ま、二、方、ん、其、二、平、氏、の、領、國、と、お、り、物、憂、と、い、ひ、必、く、大、層、後、清、
 息、の、理、あ、り、今、春、より、の、天、變、し、く、兵、亂、の、兆、は、く、不、回、ま、大、變、と、い、ひ、
 今、ま、ら、ん、時、の、人、と、判、じ、此、時、と、虚、を、口、に、く、ま、ま、と、記、ん、人、と、い、ひ、

誠、に、事、を、傳、し、つ、ら、く、君、を、し、り、く、源、氏、の、嫡、流、諸、國、離、散、の、あ、り、あ、り、素
 と、ま、あ、り、い、今、つ、ら、く、我、を、ま、り、上、下、を、あ、り、の、賊、と、討、下、り、復、の、あ、り、能、く、
 報、じ、と、の、多、り、白、旗、に、な、り、く、群、雜、軍、の、と、い、ひ、衆、人、此、時、を、と、い、ひ、り、
 せ、り、昔、く、人、の、下、に、屈、し、は、ら、ん、賢、者、と、い、ひ、く、一、席、を、お、く、と、い、ひ、く、義、仲
 も、席、を、前、に、誠、に、公、論、し、つ、ら、く、家、を、あ、り、く、も、指、揮、に、あ、り、ん、ん、
 と、い、ひ、内、府、重、盛、と、い、ひ、ん、を、得、て、二、門、の、社、權、を、あ、り、く、と、い、ひ、く、
 其、の、云、中、重、盛、一、人、の、德、二、門、の、暴、を、掩、に、は、し、一、杯、の、水、二、東、の、勢、の、大、と、い、ひ、
 する、と、い、ひ、わ、ら、ん、況、必、重、盛、大、折、の、相、見、と、い、ひ、く、其、の、死、を、ん、と、い、ひ、く、
 は、君、を、ま、り、ま、と、圍、り、ら、ん、と、い、ひ、く、義、仲、を、あ、り、く、と、い、ひ、く、
 其、も、ゆ、り、く、謀、士、と、得、て、ま、ま、と、い、ひ、く、其、は、ま、い、く、と、い、ひ、く、
 家、は、あ、り、ま、り、房、諸、葛、か、り、く、別、館、を、拂、之、ま、り、く、用、い、ら、ん、と、い、ひ、く、

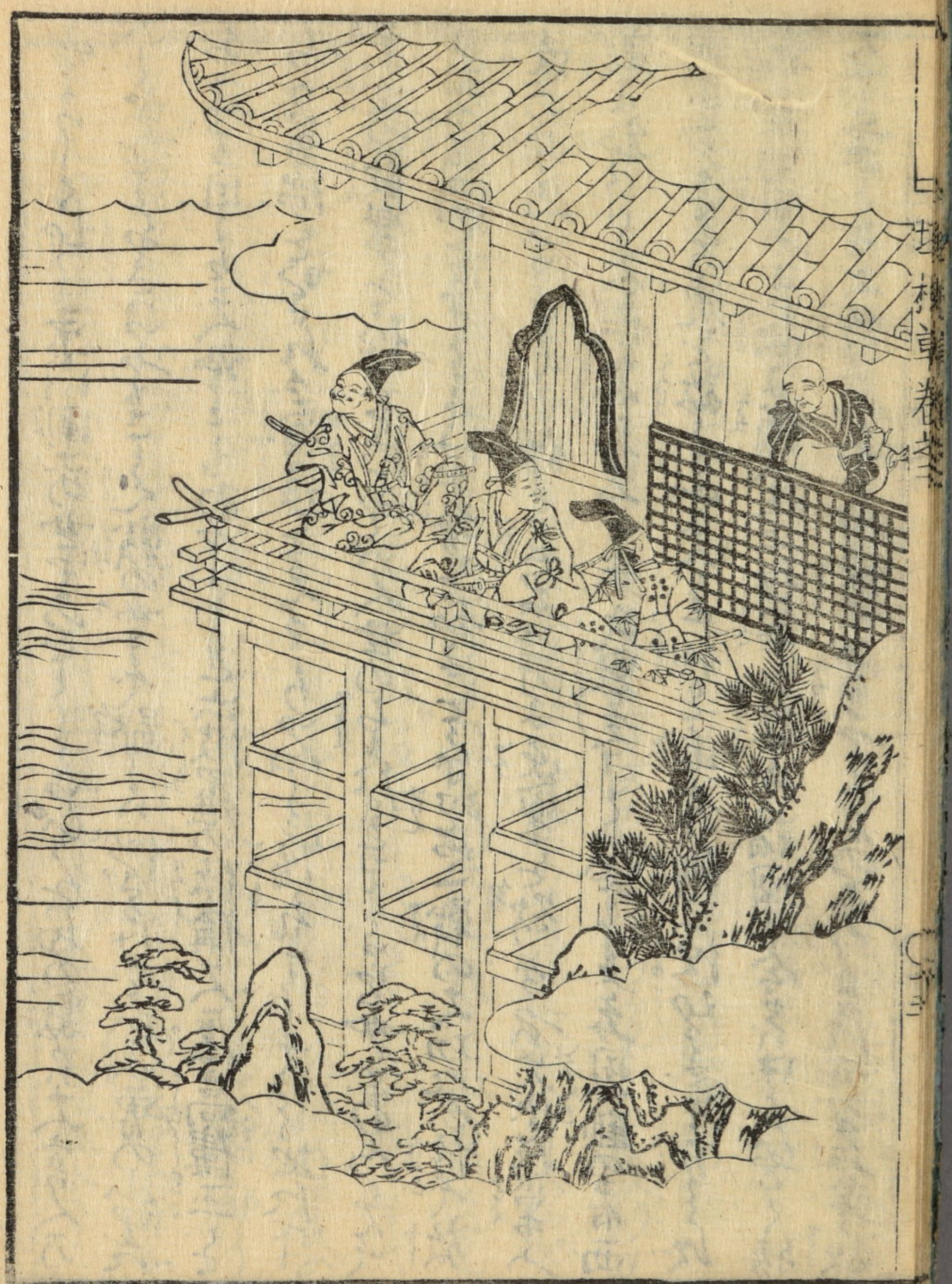
義仲が後醍醐天皇云々多々此の執居るは後醍醐天皇の元と云
 るまの國々を以て敵の動靜民の向背を以て窺ふを以て明を以
 北陸の僻境に警居るはまの國々を以て窺ふを以て明を以て
 及び後醍醐天皇云々此の執居るは後醍醐天皇の元と云
 官を以て執居るを以て加賀越前の諸君を以て招くは應仁下信長越
 後に三河を以て入るは東の兵勢を以て勝るは其機を以て四方の
 常の國々を以て守るは常の指を以て一は六波羅の討を以て引寄地理を
 弱平峻嶮なるを以て京勢を以て好の軍に以て勝るは其勢を以て守るは
 長驅しては登るは誰の遮る者のゆるを以て迫るは休るは其勢を以て守るは
 一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固

一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 一は多回を以て守るは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固
 怖るは示すは其力と合ふと必なりと鼓を以て都を以て執るは固

静よりしども其の令旨諸國平しりしんも伊達の頼朝公の
 の義何とも義兵を起りて攻むる事とて今一たび其をたてとて
 我侍連討のたもと大軍之向りんらん明計策に六波羅勢を
 いら負て敗走す事の後と著るに北陸の大軍潮の湧きく殺戮す
 りし此復の時とゆる源氏舊恩の諸士地加りて洛中に乱入す事
 社のもと平其兵聲しりんとそのすも平氏の二門一我もはらた上
 門院を依奉しりしを隆家の太の侍とていぼるごとく西國とて
 彼處を我侍都へ今法皇の御所をまねり感銘するに猶も平氏の
 一族とてしる福の根とてら宸襟と安んぶ事との初とてなれ
 軍馬の旁と休む御も我侍北陸より二國報難の念より外
 都留守留のしる見聞す事所生涯るも別々繁花風流水

山よりしりし東門圍ふ其雲のどとていひんもの敷る大宮人乃
 いかんともあつたもささげの女を都へ似たりけし不意の山雲に
 ありて同しと人候ともあつたもささげの結梅入度高樓玉と
 ちりづら御をかざらる者候とらんらんしりし情をけりてかた地は下
 半世の歡樂とて候るものあり人世のらしたる事とてささげとあつた
 里夜淫酒とすましく軍務とゆふとささげの戦の大功に公情を放
 遠の兆とてささげの明諫とて君世所よ遠樂と候るもの大宮に
 燕よりしりし大禍忽ち来りて平氏敗走す事とてささげの恩顧の者西
 國よりささげの虎と候るものささげの親と追て淵に沈むるもの
 要害と固く敵よ備へ上神器と扱へ諸國を令ぎけりたさく勝
 るも軍とささげの侍に兵の神速と貴ぶるものささげのささげの
 欲

山崎闇斎



山崎闇斎

軍の怖意さるぬ同は短兵急攻せしむ一戦に擒はるる事あり
 やすら終るは窮鼠却て猫を食の器ありや後兵加り擒は擒るる
 その人頼朝義経等の數人の皆故左馬頭の遺子に於て已に義経と
 何ぞ其の下にありんか今と守るる事や古より兩雄並ぶたは其重
 と重なりて理の當れあり今平家と族滅しく大功と建く其後都
 に守護とありて君の庇障ありて天下兵馬の權と握りたる事
 赤松の事とては其時より其時より歡樂とありて平家となりて
 晩く都より其朝家親しくなる事とて其出とて
 終るる不正の罪とありて必や今日平家の人敵あり後
 頼朝義経の鼻祖あり其仲間より逸とて其後
 患とありてそのぬ小豆の貝とておぼとて抄書の諫とありて

論議乃者親をく人却て其明と疎んがなり見之傳く其明退
 へ難く云鳴呼はきりたれを歡園とていふ主將驍士等と
 一及守門より其の雙と安松とて詠とんを其の
 赤松は從ひて其房から其書を其守門に其書厚とて其附
 とありて去留よかわんやと遂に何地も其跡とて其影
 とありて其の事其行跡とて其求むる事其行跡と
 其の果て其行跡と其行跡と其行跡と其行跡と
 其の事其行跡と其行跡と其行跡と其行跡と

義仲のすゝめりし其身孫會より天下の兵權と掌りて其の
 義仲と諱とて傳へ國をわたりて義仲と其勅を用ひたる
 今日わたりは後には滿離とてその天に下りて是より覺明とて水
 也之も其所在たりおんは後文治五年義経衣門より自鞍ヶ海内
 急ぐ孫會のよに傳へて建之ん多賴朝と諱へて恩と謝を法皇
 の御心をよやく數日滞留のち和同四王堂の若殿系出の殿とて
 して湖水に舟をせりて其の請ひて侍りて頃も満月にて山が峰
 出ると影の湖水に照りて今今波煙の樹木を照らしも又國圖のけ
 わりて疑りて風情の堂の欄を居ありて白霧の山に
 一人白霧山深鳥一聲と吟みて一人の月より使の樓と詠詠す
 たり佛の燈挑居りて法師のちとて月より使の樓と

こそわりのことと獨りてと國をて各寺と持てて其の考れば法師
 はわりのことと清證とてかろき人々と徒者といふ身のこと
 りらまらん影もあはれ遺憾のこととてはなれりて月より
 の向を公はるる趣とてとて得たりたりとて夜をて居りてあはれ
 賴朝とて語りてまたおんはれりて業とて傳へて重忠とてとて
 必す本をん後いなりて是明をて石のあはれりて隠れりて
 必す本をん後いなりて是明をて石のあはれりて隠れりて
 彼よとて誘引しよとてをてはれりてとてとて跡をかくて行る
 ともはれりて家多身後とて兵機妙等を考へて且て文章に達したるは

承に仕せまはれん残をさし置いた諸人へもえ懸いそん
 しの後子免明の高野より見えの妙家へ連華谷の明遍法師と
 していそがひたより入國の段の傍りかゝるむらの産あるして遠くその
 ちりりいん終りぬしつゆ侍の後まともなる業の捨りやぞと教
 指揮の杖に其項書る此書の人師仕多の著本たる文選よりり
 かゝるもの解がさるる命困居のらん杖と作て今れまをや
 しる誠な文武の全才なりと頼朝の惜まきつてもびる唯我はの用
 らしむるものぞりこそ千載の遺恨なりと釋門はわかれ論とをさ
 りしものぞりこそ其の家豪傑なる柄なりはまかり文貫法師の
 らしむる遺蹟の福と招きたりよはしるは又洲のまじ侍りそや
 席上奇觀垣根草二之巻終

